

戦跡とノスタルジアのあいだに

——「旅順」観光をめぐる——

荒 山 正 彦

旅のはじめに

二〇世紀のおわりという歴史の節目において、この一〇〇年間でさまざまなかたちで回顧されてきた。「二〇世紀現象」とも称されることのある「観光現象」も、こうした一連の回顧のなかにある⁽¹⁾。近代的なツーリズムは、十九世紀中頃から大きな社会的・文化的現象となったが、その発展と普及は、まぎれもなく交通機関の発達によってもたらされてきた。とりわけ、一九二〇年代をひとつの頂点とする定期的な海上航路の確立と、十九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、主な大陸を東西に結びつけた鉄道とが、そうした役割を果たしてきた。

一九九七年の映画「タイタニック」に描かれた客船タイタニック号の遭難は、一九二二年の出来事であったが、ちょうどこの二〇世紀初頭には、大量の輸送能力を持つ「豪華客船」の航路が、大西洋上や太平洋上に張り巡らされた⁽²⁾。一九九三年に「船の科学館」（東京）でおこなわれた特別展「魅惑の船旅」、そして一九九六年に「サントリミュージアム」（大阪）でおこなわれた「あこがれの船旅」展はともに、こうした船舶のネットワークが、船旅というツーリズムと分かちがたく結びついていることを、あらためて気づかせてくれた⁽³⁾。

また、鉄道に関しては、近代ツーリズムの嚆矢でもあるイギリスのトマス・クックによる一連の団体旅行が、十九世紀のイギリスにおいて、国土に網の目のように張り巡らされた鉄道のネットワークを巧みに利用したものであったことは周知の通りである⁴⁾。そして、イギリスに起源をもつこの「鉄道」という輸送機関は、その後ヨーロッパ各地に普及し、さらにアメリカやオーストラリア、アフリカ、ユーラシアの各大陸において、その内陸部を貫く大量輸送の交通機関として、地球規模での普及をみることとなった。とりわけ、宗主国が自らの植民地において、その空間的基盤として鉄道を敷設してきたことにも留意せねばならない⁵⁾。

こうして、二〇世紀初頭において、グローバルスケールでの船舶と鉄道によるネットワークが形成され、ここで形づくられた地表上の網の目を利用して、大量のツーリストが世界を観光することとなった。ヨーロッパ各地での政府観光局の設置、あるいはカリブ海やハワイ諸島、バリ島などにおけるあらたな観光開発、アフリカのサファリ・ツアーなどの誕生は、グローバルスケールでのネットワーク形成に伴うものにほかならない。

このような二〇世紀初頭における交通ネットワークの形成と観光という出来事は、日本を含むユーラシア大陸東部、東アジア、東南アジアにおいてもみられた。一八九一年に着工がはじまったシベリア鉄道も、一九〇三年にはベルブルグからウラジオストクまでの全線が開通し、この大陸東部において、ロシアをはじめ、イギリス、フランス、ドイツ、ベルギー、アメリカ合衆国、そして日本などが競って鉄道の敷設をおこなっていた。また海上においても、ヨーロッパ列強による東アジア、東南アジアへの航路拡大や、日本を起点とした日本郵船・大阪商船の航路建設などがみられた。つまり、このユーラシア大陸東部、東アジア、東南アジアの各地域も、地球規模でのネットワーク形成のトレンドに確実に組み込まれていたといえよう。

本稿においてまず注目する点は、そのようなネットワーク形成に伴って実践された、同地域での観光についてである。拙稿においてすでに指摘したように、二〇世紀前半期、日本を起点とした観光はひろくおこなわれていた⁶⁾。

日本国内での観光ブームばかりではなく、朝鮮半島や「満洲」、中国、「南洋」などへの観光旅行は、ときに修学旅行や職場での団体旅行という形態をとりつつ、かなり一般的に経験しうるものであったと考えられる。こうした一連の観光のなかにあって、本稿で取り上げるのは、日本が今世紀初頭において深く関わりを持ち、戦後の長い期間は外国人の旅行が制限され、そして一九九〇年代末に再び日本を含む外国に解放された、中国東北地方の「旅順」である。

I 一九三〇年代の旅順観光

戦前期における日本から「満洲」への旅行、とりわけ観光を目的とした旅行については、これまで断片的な指摘がなされてきたにすぎない。たとえば白幡¹⁾は、「不幸な旅行の時代」と題して、二〇世紀前半期における日本からの朝鮮半島や中国への旅行を、雑誌『旅』の記事から指摘しているが、従来の観光史上にはあまり登場してこなかった。

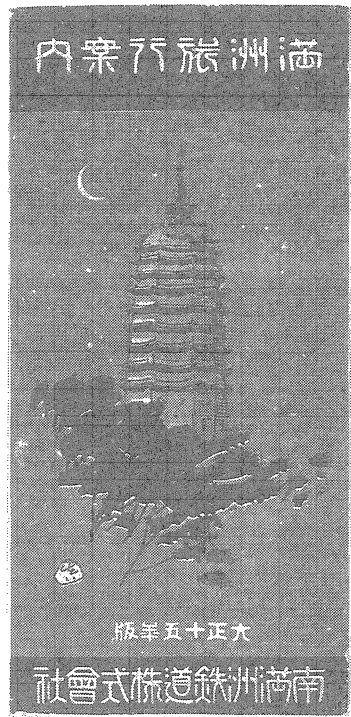
こうした研究動向の中で、高は、日露戦争終結後の一九〇五年から現在に至る、日本人による「満洲」への観光旅行のアウトラインを描いている²⁾。また藤田は、中国・上海に開設された東亜同文書院の学生たちがおこなった中国全土の調査旅行の実態を詳細に報告しており、前述のような東アジア・東南アジアにおけるツーリズムの実状を実証的に明らかにしているものである³⁾。しかしながら、現時点での筆者の理解も含めて、二〇世紀前半期における日本の観光史は、まだ十分には描かれていない。今後の研究課題として求められるのは、個別の事例を実証的に明らかにすること、同時代におけるグローバルスケールでの観光現象への位置づけであろう。本稿では、こうした意図に基づいて、旅順観光の一端をまずは記しておきたいと考えるのである。

西暦二〇〇〇年の現在、旅順は、中国東北地方の遼寧省大連市の一地区「旅順口区」として管理されている。人口約二〇万人の古くからの軍港のまちでもある。一八九四年の日清戦争、そして一九〇四―五年の日露戦争時には、戦場として、とりわけ、日露戦争においては、ロシアとの地上戦をおこなった激戦地として、後の日本人には記憶される場所となった。

こうした戦跡地旅順を、見学や観光の対象として捉えはじめたのは、日露戦争終結後、間もなくのことのようである。徳富蘇峰は、明治三十九年（一九〇六）、朝鮮半島を経由して三か月間あまりの「満洲」旅行をおこなっている。同年六月九日に大連から旅順へ至り、戦場見学を次のように記している。「十日午前より石光砲兵中佐の案内にて、所謂の我が同胞の戦骨を、山の如く高らしめたる、松樹山、二竜山、東鷄冠山、其他の堡壘を見物致し候」^⑧。また夏目漱石は、明治四十一年（一九〇八）から翌年にかけてのおよそ一年間、やはり朝鮮半島と「満洲」を旅行し、明治四十二年（一九〇九）十月二日から十二月二〇日にかけて、その旅行記録の一部を朝日新聞に連載している。この紀行文『満韓とところどころ』にも、旅順に関する記述があり、戦勝記念碑、戦利品陳列所、砲台、そして二〇三高地などを見学したことが記録されている^⑨。

このように、日露戦争終結後まもなく、戦場旅順は、日本からの旅行者によって見学され、記録され、日本の読者にその紀行文が提供されていたことがわかる。そこで、こうした特定の人物による旅順訪問ばかりではなく、より多くの日本人による旅順観光旅行について、いくつかの断片的な資料からではあるが、その事実関係を整理してみた^⑩。

そもそも、「満洲」観光そのものの歴史的な経過は、現在の筆者にもよくわからない。およそ一九二〇年代から一九四〇年代はじめまでの、「満洲」旅行を裏付ける、観光用のパンフレットやリーフレット、あるいは観光旅行案内書や旅行記、そして朝鮮半島や「満洲」への旅行のエージェンシー「鮮満案内所」^⑪の存在、そして同時期の観光白



第1図 満鉄が作成した満洲旅行案内（大正15年版）

書とも言うべき『鮮支旅行年鑑』⁴⁾などの断片的な資料を通して、おぼろげながら、「満洲」観光の実態が浮かんでいるにすぎない。

こうした、「満洲」観光を物語る資料の一つに、南満洲鐵道株式会社によるリーフレット「満洲旅行案内」（大正十五年版）がある（第1図）。南満洲鐵道株式会社、いわゆる満鉄は、当時日本最大

の株式会社であり、その実態は、鐵道の經營ばかりにあつたのではなく、文字通り中国東北地方に君臨していた⁴⁾。そうした多角的な「満洲」經營のひとつとして、スポーツや音楽、映画の製作などとならぶ文化的な事業として、観光旅行業の一翼を担っていたと考えられる。

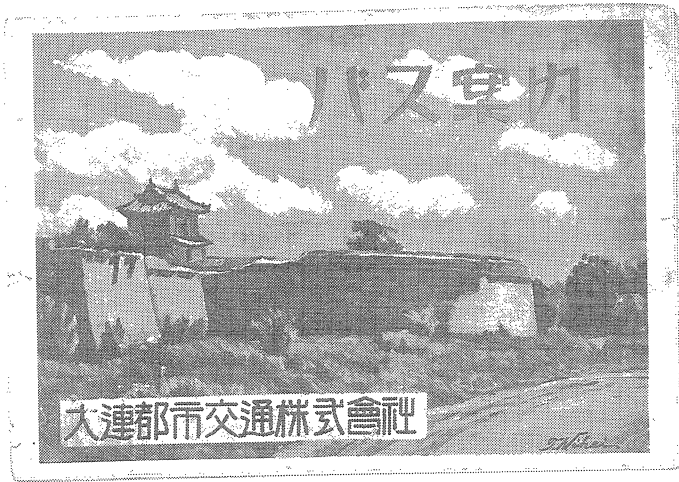
大正十五年版のこの旅行案内には、「満洲」各地の鐵道沿線の案内がなされている。そのなかにあつて旅順は、大連や奉天とならぶ重要な場所として記載されているが、この三地域の沿線案内では、それぞれの地域が特徴づけられている。まず大連の案内では、貿易港として發展する「埠頭」、あるいは中央試験所と地質調査所、工場地帯、そして郊外の星ヶ浦や老虎灘と呼ばれる風光明媚な海岸風景である。また「奉天」の案内では、清国の歴史を刻む「奉天城」、宮殿、北陵、東陵などがとりわけ強調されている。一方、旅順の案内では、満蒙博物館や海水浴場黄金台とならんで、二〇三高地、戦跡、白玉山の表忠塔、紀念品陳列館といった、日露戦争の戦場や戦死者の慰霊を目的とした記念碑、そして戦争の戦利品などが案内されているのである。

日露戦争の戦地を克明にたどるならば、その戦場・戦跡は、遼陽や奉天など、旅順以外にもみられる。しかしながら、この旅行案内の記載に限定するならば、日本からの旅行目的地としての戦跡は、ひとり旅順のみが記載されているにすぎない。後述のように、こうした観光のもとでの戦跡とは、実際に戦闘がおこなわれ、戦場となった場所がすべてそうなるのではなく、戦争を記念する記念碑や忠霊塔、戦利品の陳列などの、メモリアルな事物がなくてはならない。わずかに一柱の石碑であったも、一枚の案内板であったも、そうした造営物が、戦場を戦跡としてつくりかえるときの、視覚的な仕掛けなのである。

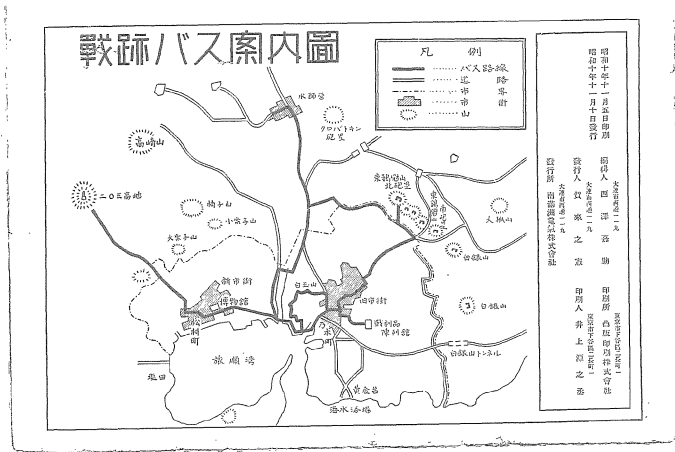
ところで、「満洲」の観光白書ともいべき『満支旅行年鑑』によれば、「満洲」観光を受け入れる現地において、数多くの観光協会が設立されていたことがわかる。旅順にあつては、昭和十年（一九三五）十二月、旅順市役所内に「旅順観光協会」が創設された。たとえば、昭和十五年版の『満支旅行年鑑』⁴⁰によれば、旅順観光協会の活動事業は、一、観光座談会の開催、二、戦跡案内講習会の実施、三、無料休憩所の設置、四、戦跡ポスター、ならびに冊子「聖地旅順」、絵はがきの作成と配布、の以上四つの活動が記載されている。すなわち、ここでみる限り、旅順の観光とは戦跡の観光であることがうかがわれるのである。

また、この『満支旅行年鑑』には、「満洲」と中国各地の観光地案内として、名勝や旧跡、運動施設などとならんで、戦跡がひとつの項目とされている。この年鑑のなかで、「観光地・戦跡」として列記されている場所は、旅順ばかりではなく、金州、奉天、新京など、数多くの記載がみられる。その中にあつて旅順は、「東亜の平和は日露戦役の賜である斯くて我等が骨肉近親の碧血と死屍に蔽はれた旅順の山と海、野と河は永遠に霊場であらねばならぬ」として、ほかの多くの戦跡の中でも、特別な配慮が払われていることを窺わせる⁴¹。

さて、一九二〇年代から四〇年代にかけて、戦跡旅順は、日本人ツーリストの観光目的地として確立していたわけであるが、観光旅行の具体的な姿についても、その一端を明らかにしておきたい。さきの『満支旅行年鑑』によれ

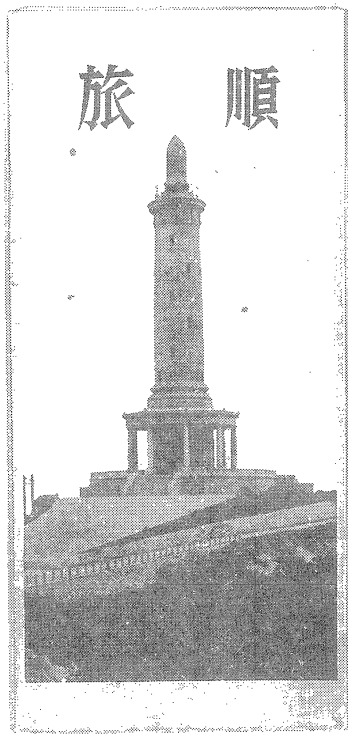


第2図 大連都市交通の遊覧バス案内 (昭和10年)



第3図 旅順戦跡バス案内図 (大連都市交通の遊覧バス案内)

ば、旅順に点在するいくつかの戦跡地を効率よくまわるには、「戦跡視察観光バス」が便利であることが記載されている。第2図は、大連都市交通株式会社による、昭和十年（一九三五）における定期観光バスのパンフレットである。都市の定期観光遊覧バスは、今日では日本をはじめ、世界各地の都市においてもしばしば目にする観光のメディアである。日本においては、大正十四年（一九二五）に、「はとバス」の前



第4図 満鉄が作成したリーフレット「旅順」(昭和8年)

身である東京遊覧乗合自動車による東京市内のバス遊覧を嚆矢として、その後昭和初期にかけて、京都、別府、小豆島などでも同様の遊覧バスがはじめられた。この都市の遊覧バスという観光のまなざしは、この時期の「満洲」においても、有効な観光の手段としてしばしば用いられたようである。

第2図のパンフレットには、二つの遊覧バス案内があり、一つは「大連市遊覧」、いま一つは「旅順戦跡」である。第3図は、このパンフレットに記載されている旅順戦跡めぐりの案内図である。この遊覧バスのコースは、パンフレットに従えば、旅順乃木町営業所を出発して、白玉山、戦利品陳列館、東鶏冠山北砲臺、水師營、二〇三高地、博物館である。料金は一人一円五〇銭と記されている⁸⁾。

こうした戦跡旅順への観光のまなざしを、もう一枚のリーフレットから分析してみたい。第4図は、南満洲鉄道株式会社による昭和八年版(一九三三)の旅順のリーフレットであり、白玉山の写真がこの表紙を飾っている。こうした表紙のデザインが象徴的に示しているように、旅順は、「満洲」観光の中にあつて、まぎれもなく、戦跡にその特徴がある。しかしながら、このリーフレットにおいて宣伝されている「語り」をみると、第1図において示した、大正十五年版(一九二六)の「語り」とは微妙に異なることに気づく。

この昭和八年版の「旅順」も、その案内の内容は、終始一貫して、戦跡旅順の具体的な事物の案内であるが、微妙に異なる点は、このリーフレットの書き出しにある。冒頭で述べられているのは、戦跡としての戦争の生々しさでも

なく、また戦跡に造営された記念碑や忠霊塔の説明でもない。そこには、次のように、この旅順の地がいかに自然の美しい風景に恵まれた場所であるのかが強調されているのである。

遼東半島の一角に位して、風光の明媚、氣候の温和、他に比類なく天恵の豊かなるわが旅順である。まことに南面すれば紺青の鮮やかに洋々たる渤海を控へ、左右に白砂青松の海岸を擁し背面は山又山の屏風をめぐらした天嶮、(中略)地中海のニース・モナコ、或は鎌倉・須磨・舞子に勝るとも断じて劣らぬ極東唯一の、一大避暑地乃至は避寒地として世界にその名を轟かすべき運命をもつとさへ言はれている。

旅順は、たしかに地理的には南側を海に面しており、海洋性の氣候ゆえに、この中国東北地方の中では冬の寒さも厳しくはなく、また夏も盆地ほどには高温にはならない。しかしながら、日露戦争における最大の激戦地としての凄惨さを一方におもつとき、この自然の美しさに対する手放しの賛美には、とまどいを覚える。こうした戦争の凄惨さと、自然美との親和的な関係について、いかに考えればよいのであろうか。

アンダーソンは、「ナシヨナリズムの起源と流行」を副題とした『想像の共同体』のなかで、イメージとして心の中に想像される「国民」の紐帯として、「無名戦士の墓と碑」を取りあげて論じている。「無名戦士の墓と碑、これほど近代文化としてのナシヨナリズムを見事に表象するものはない。これらの記念碑は、故意にからつぽであるか、あるいはそこにだれがねむっているのかだれも知らない。そしてまさにその故に、これらの碑には、公共的、儀礼的敬意が払われる」¹⁰。

日露戦争後、旅順につくりあげられた記念碑・忠霊塔もまた、イメージとして心の中に想像される日本人の紐帯として機能したことは間違いないであろう。こうしたモニユメントへの観光は、旅順と、日本や日本人とを結びつけ

る象徴的な出来事にほかならない。そして、こうした想像力をつくりだすこれらのモニュメントは、また同時に、戦争の凄惨な殺戮や、人間の死についてのリアリティを著しく欠くものでもある。旅順はかつての戦場であり、まぎれもなく戦争の記憶がそこには存在するはずであるが、戦跡観光での経験は、そうしたリアリティがすっかり抜け落ち、国民を想像する大きなナラティブに回収されてしまう経験なのである。戦時下における個々人の体験は、とても個別的で具体的であったはずであるのに、こうした戦跡観光の場においては、個別の具体的な出来事に対する、個別で具体的な追体験などではなく、すぐれて集合的な記憶の物語として回収されてしまう⁹⁹。

そして、こうした個別の出来事を集合的な記憶の中に回収し、さらに美しく飾るのが、自然の風景美という修飾にほかならないのではないかと考える。このとき何よりも重要な点は、戦跡においてさえも自然の風景美が浮かび上がってくるのは、その場が、観光地であるという点に起因するであろう。すなわち、観光のまなざしが介入することによって、アンダーソンが指摘したナシヨナリズムの枠組みが、結果的に強化され、またその枠組み自体が忘却されることに大きく寄与しているということになろう。

II 二〇〇〇年の旅順観光

一九九六年七月十日、中国の遼寧省大連市旅順口区は、その一部が外国人旅行者に対しても開放された。現在中国において、この「旅順」は、日本とロシアという二つの帝国主義が引き起こした「侵略戦争」のメモリアルな場所として、その意義を果たしている。中国国内向けの戦跡旅順の意義は、一九二〇年代から四〇年代にかけての、日本のネイションにむけてつむぎだされたナラティブと、同じ構造を持つものであると捉えることもできよう。こうした戦跡が、国民と分かちがたく結びついているとすれば、問題は、当の戦跡が国民以外の人々に解放されたときであ



写真1 東鶏冠山の堡壘内部

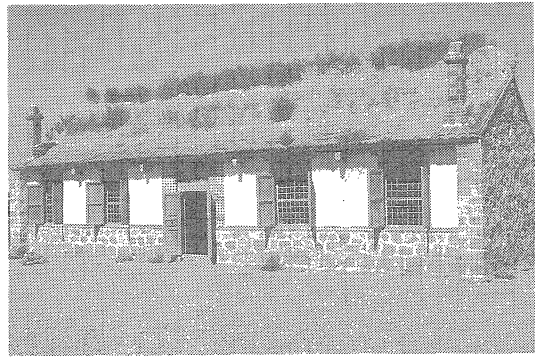


写真2 復元された水師営会見所の建物

さや、戦場の生々しさを思い起こさせるような銃弾の跡などを見学できるように順路も工夫されている。しかしながら、こうして旅行者の目にとまる堡壘のなかには、一九九〇年代後半にあらたに復元されたものもあるという。こうした堡壘の公開は、そのままの形でなされているばかりではなく、このような復元が伴っていることをここでは指摘しておきたい。

こうした復元がもっとわかりやすい形でなされたのが、水師営会見所である（写真2）。水師営会見所は、日露戦争における旅順開城の交渉を、日本の乃木希典とロシアのステッセルがおこなった場所であり、一九二〇年代から四〇年代においても、日本人にとっての戦跡観光の目的地であった。この会見所も、やはり一九九〇年代に復元され

る。ここでは、二〇〇〇年における旅順観光の個人的な経験から、あらたな旅順の意味づけについて考察したい。二〇〇〇年九月の時点において、対外的に開放されていたのは、旅順市街地を取り囲む、郊外の三か所、東鶏冠山、水師営会見所、そして二〇三高地であった（第3図参照）。

東鶏冠山は、ロシアが築きあげた堡壘が、文字通り要塞のようにつらなる（写真1）。堡壘の規模の大き

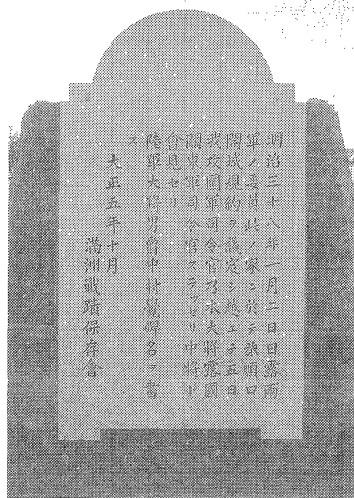


写真3 水師會見所を示す石碑
これも近年復元された



写真4 「203高地」で販売されている土産品

た旅順の観光地のうち、もっとも観光地らしく仕立て上げられた場所であろう。二〇三高地の頂上からは旅順のまちなみを見下ろすことができ、その眺望を楽しむことができるが、その山頂では、風景を楽しむための貸し双眼鏡が並べられている。日本人旅行者がこの双眼鏡を借りて、未解放の旅順市街地や、軍港である旅順港を眺めることがしばしばあるそうである。また、この二〇三高地には、ガラス細工や食品類などの一般的な土産物に混じり、旅順の絵はがき、写真集、はては「二〇三」を明示したTシャツなどが販売されている（写真4）。

一方で一九九九年には、日本国内において旅順の案内書も刊行された⁴⁾。この案内書は、副題が物語るように、日本や日本人が旅順と直接関わり一〇〇年を経たその歴史を、モノクロームとしてではなく、「セピア」色にたとえて

た。しかも、「会見」の場所となった建物の復元のみではなく、この場所が会見所であることを示し、大正五年（一九一六）に満洲戦跡保存会が構築した石碑までもが復元されたのである（写真3）。

二〇三高地は、対外開放されたこうし

いる。単に古いのではなく、そこには古さを懐かしむ感情が込められているように思われる。

また他方で、中国東北地方へのパッケージツアーが、JTBやジャルパックなどから発売され、それらの宣伝パンフレットにはさまざまなキャッチコピーが並べられている。旅順口区を含む大連市の観光用キャッチコピーは、「旧時代の街並みに郷愁とロマン漂う大陸の街。今世紀前半の重厚な建造物と街並みに、かつての大陸の面影を感じる大連の大広場。人々のやさしさに感激するノスタルジックな港町」(「ジャルパック」)である。二〇〇〇年の現在における、かつての「満洲」への旅行は、こうしたノスタルジアやエキゾティシズムがその根底に存在している²⁰⁾。

二〇〇〇年に中国で刊行された『旅順口近代戦争遺跡』(大連出版社)と題する写真集は、中国語と日本語が併記されているが、日本語活字のポイントが大きくっており、明らかに日本人旅行者を想定してつくられた写真集だと考えられる。この写真集は、たとえば南京の博物館で売られているような、全体が殺戮・殺害の現場からなるものとはずいぶん異なる。

こうした一九九〇年代後半における、中国東北地方での観光事情を、高は次のように分析する。「日本人旅行者は中国来訪者の外国人の中で、一貫してトップを占め(大陸以外に居住している中国人を除いて)、中国への第一大送客国となっている。とくに、中国東北地方の各主要都市を訪れた日本人観光客の総数は、外国人観光客の中でいつも高い比率をしめて」おり、また「日本は遼寧省の最大の貿易パートナーとなっている」。したがって、「ノスタルジア・ツアー」で訪れてくる日本人観光客のまなざしを意識して、積極的に「旧満州」の商品を提供する」と²¹⁾。実際、この二〇〇〇年に、大連市街地ですめられていた「日本風通り」のまちづくりは、そうした日本人観光客のまなざしをはっきりと意識したものであろう²²⁾。

しかしながら、大連にせよ、旅順にせよ、一方的に日本人旅行者のまなざしのみを意識した観光地化がすすめられていると断じることができない。現在の中国では、外国からの観光客ばかりではなく、中国国内の旅行者、そして中

国国外に居住する華人旅行者のまなざしにもかなう観光開発が各地で実践されている⁶⁾。

今後、日本からの「満洲」観光のまなざしと、中国での「満洲」の語りとはどのような折り合いが付けられるのであろうか。本稿において意図する観光史の記述は、観光という現象を歴史的に跡付けていくと同時に、観光現象をとりまくまなざしな出来事の理解である。

付記 本稿は、日本地理学会・近代日本の地域形成研究グループ研究集会（二〇〇〇年十一月十日）における報告「郷愁と異郷のはざま——日本人旅行者による「満洲」の経験と記憶——」の一部をもとに脱稿したものである。研究会当日、多くを教示くださった先生方に深く感謝いたします。また本研究にあたっては、一九九九年度関西学院大学個人特別研究費を使用した。

註

- (1) たとえば、国立民族学博物館の特別研究「二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容」という一連の取り組みの中で、一九九四年にシンポジウム「観光の二〇世紀」が開催された。石森秀三編著（一九九六）『二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容三——観光の二〇世紀——』ドメス出版。
- (2) 野間 恒（一九九三）『豪華客船の文化史』N T T出版。
- (3) これらの展示については、それぞれの図録「特別展「魅惑の船旅」——ポスターに見る客船史——」（日本海事科学振興財団・船の科学館、一九九三）、ならびに『あこがれの船旅展』（サントリーミュージアム、一九九六）を参照されたい。
- (4) ピアーズ・ブレンドン著、石井昭夫訳（一九九五）『トマス・クック物語——近代ツーリズムの創始者——』中央公論社。
- (5) C・B・デイヴィス、K・E・ウィルバーンJr. 編著、原田勝正・多田博一監訳（一九九六）『鉄路一七万マイルの興亡——鉄道からみた帝国主義——』日本経済評論社。
- (6) 荒山正彦（一九九九）戦前期における朝鮮・満洲へのツーリズム——植民地視察の記録『鮮満の旅』から——、関西学院学二六。
- (7) 白幡洋三郎（一九九六）『旅行ノススメ——昭和が生んだ庶民の「新文化」——』中央公論社（中公新書）。

- (8) 高 媛（一九九八）「大東亜共栄圏」から「郷愁を誘う」旅へ——日本人の「満洲」観光——、旅の文化研究所紀要七。
- (9) 藤田佳久（二〇〇〇）『東亜同文書院 中国大調査旅行の研究』大明堂。
- (10) 徳富蘇峰（一九〇六）『七十八日遊記』民友社。
- (11) 夏目漱石の「満韓とくろどころ」（一九〇九）は、たとえば、『漱石全集第十二巻』（岩波書店、一九九四）などに収録されている。
- (12) 「鮮満案内所」とは、南満洲鉄道会社が設立した旅行エージェンシーであった。設立時期などの詳細はよくわからないが、大正期において、東京、大阪、下関の三都市に案内所を設けていた。その後、東京分室、名古屋出張所、門司案内所、小樽案内所などが開設されている。「満洲」旅行にあつては、ジャパン・ツーリスト・ビューロー（後の東亜旅行社）などよりも、大きな役割を果たしていたと考えられる。
- (13) 『満支旅行年鑑』は、管見の限りではあるが、昭和一四年（一九三九）から昭和一九年（一九四四）の間に、毎年刊行されている。その分量は四〇〇〜七〇〇ページにおよぶ。ジャパン・ツーリスト・ビューローなどによって編集され、東京の博文館などから発行された。
- (14) 満鉄に関する研究にはすでに多くの蓄積がある。たとえば、小林英夫（一九九六）『満鉄——「知の集団」の誕生と死』吉川弘文館、あるいは西澤泰彦（二〇〇〇）『図説満鉄——「満洲」の巨人——』河出書房新社など。なお、こうした満鉄の研究においても、先の鮮満案内所をはじめ、「満洲」観光にかかわる記述はほとんどみられない。
- (15) ジャパン・ツーリスト・ビューロー満洲支部（日本国際観光局）編（一九四〇）『満支旅行年鑑』博文館。
- (16) 戦跡旅順が、ほかの多くの戦跡とは差異化され、特別の意味や価値を担う戦跡として、とりわけ観光の現場において立ち上る経緯については、より実証的な分析が求められよう。この点は他日に期したい。
- (17) 荒山正彦（二〇〇〇）小京都から小江戸へ——都市にそがれるまなざし——、地理四五—三。
- (18) 昭和十年時点での一円五〇銭は、二〇〇〇年の現在のおよそ四〇〇〇円に相当すると思われる。週刊朝日編（一九八七）『値段の明治大正昭和風俗史』朝日新聞社（朝日文庫）。
- (19) ベネディクト・アンダーソン著、白石さや・白石 隆訳（一九九七）『増補 想像の共同体——ナショナルイズムの起源と流行——』NTT出版。
- (20) こうした集合的記憶に関しては、成田龍一（一九九六）関東大震災のメタヒストリーのために——報道・哀話・美談——、

思想八六六、あるいはテッサ・モリスル鈴木著、大川正彦訳（二〇〇〇）『辺境から眺める——アイヌが経験する近代——』みすず書房などを参照されたい。

(21) 「旅順探訪」刊行会編（一九九九）『最新旅順大連探訪——百年の歴史を刻んだセピアの世界——』近代消防社。

(22) 本稿の論旨とは直接関わりを持たないが、「ノスタルジック満洲」という観光の商品は成立し得ても、これと同じ意味での「ノスタルジック韓国」というような観光の商品は成立し得ないように思われる。この差異をどのように捉えるべきであるか。

(23) 高 媛（一九九九）「被害者」としてのホスト——戦後の「満洲」観光における中国——、観光に関する学術研究論文入選論文集（財団法人アジア太平洋観光交流センター）。

(24) 大連市では、ロシア街のまちなみ復元、韓国街のまちなみ復元と並んで、「日本風通り」のまちなみづくりがおこなわれている。その経過を伝える大連市の日本人向け情報誌『D. NAVI』五六号（二〇〇〇）には、「日本の風情を活かし、歴史的価値の継承と新たな魅力の創出を兼ね備えた個性的な街をつくることによって、経済的な目的以上に日中友好を目指している」と紹介されている。

(25) 松村嘉久（二〇〇〇）祖国中国をいかに見せるのか——観光、スペクタクル、中華民族主義——、中国研究年報六二三、韓 敏（二〇〇〇）現代中国における毛沢東の意味とその操作——毛沢東の故郷、韶山の観光地化に基づいて——、民博通信九〇。